

アムールの風

（正統右翼の論理）

第16回
田中健之
（黒龍會会長）

——覇道から王道の中国へ——

日華が全面武力衝突をした支那事変の時に、頭山満をはじめ玄洋社関係者は、蒋介石と重慶政府を直接対象とした和平運動をしていました。

その時に頭山は、「汪兆銘も蒋介石も孫文の弟子。中国を思う心は一つだ」と言っていました。

要するにそれは、汪兆銘に対して何かを伝えれば、それが必ず蒋介石に伝わるということを意味していました。

日本は中国と如何に付き合っていくべきなのか？

その解を得るためには、まず中国の民心を理解しなくてはなりません。

中華革命を日本人が支援したように、中国の民主化に

民主化運動をする中国人の中には、「誰が中共のスパイなのか」と、スパイ狩りをする傾向が多々あります。

スパイだとされた人も、自分をスパイだというレッテルを貼った相手に対して、「あいつこそスパイだ」と応戦します。

お互いにスパイだとして攻撃し合った結果、組織は分裂し、運動は低迷します。

こうしたスパイ合戦は、本当にどちらか片方がスパイであることも事実としてあり得るのですが、大半は政治的な対立、人間としての感情のもつれ、嫉妬、それに政治的な派閥の対立によって、スパイ合戦が引き起こされるものが少なくありません。

それにも関わらず、日本人が主体となって、中国人の民主化組織内に潜入しているスパイ探しをするということがあってはなりません。

確かな証拠なくして、噂に煽動されて、誰がスパイであるか否かの探偵ゲームに、日本人が断じて参加してはなりません。間違えてスパイでもない人をスパイ呼ばわりしてしまう危険性も少なくないからです。

実際に、スパイだと噂され、攻撃されていた人が、有能な活動家であり、彼をスパイ呼ばわりして攻撃の急先

対して、日本人が支援する必要性があることは言うまでもありません。ただしその支援は、あくまでも中国人の主体的な民主化運動を、日本人が陰で支えることが重要なことであり、日本人が先頭に立って、中国人を指導することがあっては、断じてしてはならないことです。

例えばそれが、良心からの支援であったとしても、活動の主体が日本人であった場合には、侵略主義、謀略工作、覇道思想とそれが無意識であったとしても、根底を同じくするものがあるからです。

その辺の所の線をしつかりと弁えて、きちんとケジメを着けなくてはなりません。

ところで恐らく、中国の民主化運動や反体制派の人々の中には、中共政府の特務、すなわちスパイが必ずいるはずです。その逆にアメリカのスパイもいます。

鋒だった人が、実は中共政府が潜入させたスパイであったこともありました。

頭山流で言えば、日本人の正義、信義、正しい気持ち、真心を尽くせば、その精神は必ず敵にも伝わり、それによって日本人の偉大さ、尊さを相手が解るのです。

それを知らしめればいいのです。「あいつはスパイじゃないのか」などという憶測で物を言わず、どんな人物も分け隔てなく、別に余計なことも言う必要もなく、その人物が日常生活で困ったことがあれば、ただ黙々と真心から助けてやればいいのです。これは、私自身の経験でもあります。

私は、その日本人としての真心と任侠心こそが、日本という国を、混迷から救うことだと固く信じています。

中国の民主化は、欧米流の民主主義の押し付けであったとは、中国の文化、伝統を破壊することになります。

中国の民主化は、中国の伝統的な思想である仁愛によって統治する政道、すなわち「王道」の実践以外に方法はありません。

資本主義、社会主義は共に欧米思想であり、唯物主義です。そこには、覇者が力によって行う政道、すなわち「霸道」しかないのです。

この覇道によってもたらされる弊害が、人権問題、民族問題に代表される、今日の中国における問題です。

欧米列強の思想である覇道を棄て、中国の伝統的な思想である王道を実践することが、今日の中国の急務です。一九二〇年代に中国で起きた郷村建設運動というものがありません。

それは、「農業技術の改良や民衆教育の普及、あるいは新しい民衆自治組織の形成を通して農村を再建し、民族的危機を克服することを目指した」もので、梁漱溟という中国の思想家が提唱し、実践したものです。

彼は、西洋化の波が押し寄せた一九二〇年代から三〇年代という混沌の時代にあつて、西洋を規範とする近代化の図式に反対し、伝統の復興を主張しました。

東洋の村落の伝統的自治を復活し、伝統に依拠する形で教育を中軸に据えながら、社会の改革を目指した、梁漱溟による提唱、実践とは即ち、伝統への回帰と共同体的人間関係の復活によって、中国の危機克服を企図したものでした。

こうした梁漱溟の思想の中に、中国人が本来伝統的に持っている、中国式民主化のヒントがあると思われまふ。

中国は、欧米に押し付けられた民主化を推し進めるこ

を思い留まりました。

Sさんは、頭山満をはじめとする玄洋社や黒龍会の先覚を大事にして、中華革命を支援した日本人志士の思想と行動をうんと勉強してきた人です。

しかしその分、日本でたくさん苦勞をしています。

彼は自分で事業を起こして成功、失敗を繰り返しながら革命運動をやっているのです。

そうすると、やはり日本において、中国の民主化運動をするという事は、なかなか不安定であり、自由にできることではありません。

日本で中国の民主化に関する活動をしてきた多くの活動家が、日本に失望して、アメリカに行ってしまうました。

それは、辛亥革命の時も同様でした。日本で革命活動に参加した人々は、均しく日本に失望して、自由に活動ができるアメリカやフランスなどに相次いで亡命して行きました。日本に期待した人たちが、中国の将来について理解がない日本政府に失望したのです。

このように将来の中国を担っていく人々を日本が失望させた結果、アメリカに新天地を求めて、彼らに移住させることが日常茶飯事となっている今日、それは、日本も中国もダメになると私は思っています。

とがあつてはなりません。

それは中国の破壊に繋がるからです。あくまでも王道の実践こそが、中国を救い、発展させる唯一の道なのでからです。

——日本に失望する中国の活動家——

私には、Sさんという三十年來の友人がいます。彼は中国の民主化運動家であり、アジア主義者です。そして彼は孫文を尊崇しています。

Sさんは、アメリカとか台湾に行けば、いろいろな支援を受けられて、なかなか立派な活動ができます。

しかし、彼がそっちへ行くことを私は止めました。

「君が日本を棄てて、アメリカや台湾に亡命したら、日本と中国の関係は、将来どうなるのだ」

と言ったのです。

「あなたが革命を起こして、政権を奪取した場合、中国民主派の中で、日本を理解する者がいなくなるじゃないか」

と私は彼に力説しました。

彼も私の話を聞いて、アメリカや台湾に移住すること

今の中国の若い人たちに対して、私は将来の中国に対する希望があります。

私は第二次天安門事件の世代ですが、そうではなくて、はるかに若い人たちが中国共産党政府の中枢で活躍する一方、中国民主化を理解し、同調するような中国の若い世代の人たちが出てきていることも事実です。また、チベットや南モンゴル、ウイグルなどの民族独立運動との連帯もみられています。

それは一つのおい兆しです。この時、それを支援する日本人は、あくまでもサポートであつて、主体的に指導してはならないのです。

——中共の一番の犠牲者は中国人自身——

民主化を推し進めたい中国人と中共と関係がある中国人との見極めはとても難しいことです。

中国共産党と関係がある中国人の中には、必ずしも反目的とは限らない人も大勢います。

民主化運動をやっているからと言って、必ずしも親日的とも限りません。

ところで、日本人の支援者が中国人を無理矢理、例え

ば民主化の活動家やウイグル独立派の人びとを靖国に参拝させるような、そうした動向もあります。それは決して良いことではありません。

むしろそれは、中共欧米派の反日プロパガンダに利用され、中共知日派、親日派の勢力と親日的な中国人の世論を弱体化させるだけです。

大切なことは、「中国人はこうなのだ」とか、「朝鮮人(韓国人)はこうなのだ」、「ロシア人はこうだ」という単視眼的な目で、中国人をはじめとする外国人を見ないことです。これは当然のことですが、日本人にも色々な人がいるように、中国人や朝鮮人(韓国人)、ロシア人にも色々な人がいます。

彼らと組める人もいれば組めない人もいます。

つまり出身国や民族ではなく、それぞれの人物本位を見る必要があります。

ところで中国共産党自体は、一枚岩ではありません。

そこには色々な派閥があります。中国国内にも様々な矛盾を孕(はら)んでいるのであって、党内もまた、数々の矛盾を孕んでいます。

中国の民主化は、まず党内の矛盾をいかに上手く見極めていくかが要(かな)めなのです。

立して以来、中国人民は、その権力闘争の犠牲を強いられて来ました。

それは一九五〇年代に始まった、「隠れた反革命分子粛清運動」をはじめ、「百花斉放・百家争鳴」、「整風運動」、「反右派闘争」、「大躍進運動」、「文化大革命」、「四・五天安門事件」、「六・四天安門事件」など、中国共産党による政治闘争、権力闘争によって引き起こされる大粛清において、中国人民は常にその犠牲となって来ました。

まさに中国人自身こそ、中国共産党による最大の犠牲者であると言っても過言ではありません。

しかし、中国共産党創立百年の間、中国共産党自身が大きく変貌したのも事実です。

スターリン体制を踏襲した毛沢東時代が、一九七六(昭和五一)年九月九日、毛沢東の死去によって、四人組が逮捕粛清されて終焉(しゆうえん)しました。

四人組の逮捕、粛清によって復権したのが鄧小平です。彼は、一九七六年四月五日に勃発した、反革命動乱と認定された第一次天安門事件の首謀者として、全ての職務を剥奪され失脚していました。

鄧小平は、改革開放の道を開き、中国の近代化を推進しました。

日本の保守派の中には、中国人と中国共産党を一体化して見る人も少なくありません。

彼らは、中国共産党を反日的な存在だと決めつけて、憎い存在ならば、中国人自身も悪の存在だとして憎しみの対象にしています。

中国が叫ぶ「反日」のほとんどが、中共内部の派閥抗争と、それに絡む国内的なプロパガンダの要素がほとんどです。

対日貿易など、日本との関係が中国経済発展の基盤であることを鑑み、日本との関係悪化が、中国経済の失速に繋がることを中共自身よく知っています。従って中共が本気になって「反日」に躍起になることはあり得ず、どこかで妥協点と対日関係改善の路線を常に模索するのが、中共の対日政策です。

ところで、その中国共産党の一番の犠牲者だったのは中国人自身です。

現在の中国では、何らかの形で全てにおいて中国共産党が日常に関わっています。それを無視、黙殺しては生活が成り立つことはありません。

就職にしても、出世についても、中国共産党との関係が、人生を大きく左右します。

一九四九(昭和二四)年十月一日に中国共産党政権が成

その改革開放は、中国に貧富の格差という矛盾と、官僚による腐敗を生み出し、それが一因として、中国社会に対する中国人民の不満が、中国に民主化を求める声として爆発。一九八九(平成元)年六月四日、学生、学者、そして市民が、人民解放軍と衝突し、多数の死傷者を出した第二次天安門事件が生じるに至りました。

この年、十一月九日に鄧小平が死去、その後継となった江沢民政権は、中国の国民の中国共産党に対する不満を鎮静させるべく、より一層、経済開放に力を注ぎ、「社会主義市場経済」の導入を決定、中国を事実上、資本主義国化させました。

反日的だとされている江沢民ですが、実はその父親である江世俊は、日本軍占領下の江蘇省で、日本の特務機関ジェスフィールド七六号に協力していたと言われており、支那事変の時には、対日和平派の汪兆銘政権の官吏でした。

江沢民自身、汪兆銘政権の下で日本軍が管轄する南京中央大学に入学しており、このために日本語も少し話せます。彼は、酒が入ると日本語で『炭坑節』を歌うことで知られています。また、『北国の春』も愛唱歌だそうです。

このように江沢民は日本との縁も深く、反日的なのは

あくまでも、国内に対する政治姿勢であったと思われる。

二〇〇二(平成一四)年十一月十五日、江沢民引退後に成立した胡錦濤政権は、「和諧社会」「小康社会」というスローガンを掲げて所得格差の是正と安定成長に努め、内需主導の大量消費社会に転換することを目指しました。

二〇一二(平成二四)年十一月十五日に発足した習近平政権は、「脱貧困」を政策とし、一部の人々を豊かにさせるという段階から、次の「共同富裕」の段階に中国が入ったことを示しています。

中国が「共同富裕」を目指すことによって、発展優先の現実路線から、社会主義の平等という理念を優先することに繋がるといえる考えからです。

また、同政権下の中国では、「富強」、「民主」、「文明」、「和諧(融和)」、「自由」、「平等」、「公正」、「法治」、「愛国」、「敬業」、「誠信」、「友善」を中国の夢だとしています。

中国の民主化運動のスローガンは、「民主」、「自由」、「人権」、「法治」の四つですが、習近平が唱える中国の夢の中には、「人権」以外の三つのスローガン、つまり、「民主」、「自由」、「法治」の三つまでが同じです。

一九七六(昭和五〇)年四月五日の第一次天安門事件で中共から弾圧を受けた結果、海外に亡命して、そこを拠

委員会副委員長を務め、一九九三(平成五)年に退任しました。

また習仲勳は、香港への密航者が後を絶たないことに衝撃を受けて、広東省の改革開放を進め、党中央工作会議で経済特区構想を提起し結果、一九八〇(昭和五五)年五月に、深圳市は正式に経済特区として承認されました。

その上、習仲勳はウイグル人などの少数民族に融和的で理解がある人物で、チベットのダライ・ラマ十四世と親交が深く、腕時計を贈られています。また、内モンゴル自治区の指導者であるウランフとも、中国西北部で共に活動した時代から非常に親密な仲であり、モンゴル族の民族衣装であるデールを着て、ウランフと握手する姿も記念写真に残っています。

習仲勳は、中国共産党の元老で、その人事権に極めて影響力がある宋平と密接な関係を持っており、そうした人間関係から宋平は、胡錦濤の後継者として、習近平が指名される際の後ろ盾になっていました。

習近平は本心において、習仲勳が実現しようとした一層の経済改革と中国の近代化、それに民族融和を行うことにあるはずですが、著しい中国共産党の内部的な権力闘争とアメリカをはじめとする外交圧力、それに中国共

点に、中国の民主化運動を開始した人々と習近平は、彼が数年若いとはいえ、ほぼ同世代です。

海外を拠点に中国の民主化運動を行っている指導者の親たちの少なからずが、中国共産党の幹部出身者で、文化大革命の時に「反革命」だとして弾圧、失脚した人々でした。また、本人たちも反革命として弾圧されたり僻地に下放されたりして、非常に苦勞し、恐怖の中で、辛酸を嘗める日々を過ごしていました。

習近平の父親である習仲勳は、中国共産党の八大元老とまで言われた大幹部でしたが、反革命として、十六年間も拘束されるなど残酷な迫害を受けていました。

習近平自身も、そうした父親の影響を免れることは出来ず、文化大革命期には、反動学生として批判され、紅衛兵によって十数回も批判闘争大会に引き出された挙句に、四度も監獄に放り込まれており、一九六九(昭和四四)年から七年間、陝西省延安市延川県に下放されるという経験をしています。

ところで、習近平の父親である習仲勳は、一九七八(昭和五三)年十二月に名誉を回復して中央委員に選出され、全人代常務委員会副委員長から党中央政治局委員を経て、一九八八(昭和六三)年四月八日から第七期全人代常務

産党という巨大な官僚体質の中では、自由に身動きが出来ません。まさにそれは「中国の夢」なのです。

しかし、中国共産党の指導者の世代は若くなりつつあります。現在五十歳代前半から四十歳代後半の中国共産党の幹部が最高指導者となった時には、中国は自らが大きく変化するに違いありません。

事実、その兆しが見えています。日本はその兆しを見逃すことがあってはなりません。そのためには、中国を感情的に嫌った色眼鏡で観ては、断じてならないのです。

日本の対中政策の遅れ、失敗は、中国大陸の市場、利権の多くが欧米によって支配され、日本が参入する機会が極めて少なくなるからです。つまり日本は国益を失い、巨大な親米抗日国家が隣に成立した場合、日本は未来永劫にわたって、アメリカの支配下に置かれることになるのです。



田中 健之 たなか たけゆき

歴史作家、維新運動家。昭和38年11月10日生まれ。福岡市出身。安洋社初代社長岸岡浩太郎の曾孫で、果敢会を創立した内田良平の血脈を継承する親族。拓殖大学日本文化研究所近現代研究センター委員研究員を経て、現在、ロンドン大学東洋学研究所及びマスコフ市立教育大学外国語学部客員研究員。日露開港協定委員、2008年に黒龍省を再興し急務に就任。主な著書に『韓国に祀られる人々』、『昭和維新』、『北朝鮮の終焉』、『美は日本人が大好きなロシア人』、『横浜中華街』など。中央公論「正論」、『歴史群像』などの論議誌に多数執筆。